

女性のライフサイクルに関する研究の動向と展望

教育心理学コース 野村 梨世

Studies on the Lifecycle of Women: Recent Progress and Future Prospects

Rise NOMURA

Various studies on the lifecycle of women have been conducted since the 1970s. However, in recent years, with the diversification of living options, the prospects in the field of women's lifecycle have begun to diminish. This paper attempts to present a potential direction for this field. First, this paper confirms the significance of women's lifecycle in the current world, by going back to the definition of lifecycle, and then explores the major findings of this field based on a cultural-historical perspective. In addition, it examines the position of lifecycle in the studies of women's identity development. Finally, this paper summarizes the challenges and future prospects of this field.

目次

1. 問題と目的
2. ライフサイクルの心理学的定義
3. 現在における女性のライフサイクル研究に対する見方
4. 女性のライフサイクル研究の動向
 - A. 女性のライフサイクル研究の黎明期
 - B. 各理論とその特徴に関する歴史・文化的整理
 - C. 女性のアイデンティティ研究におけるライフサイクル
5. 課題と展望

1. 問題と目的

生きる選択肢の多様化は、国内外を問わず現代社会を説明するうえで不可欠な傾向の一つであるが、多様化への転換期は1970年代にまで遡る。この頃、日本は長寿化に影響され高齢化社会に突入し、アメリカでは公民権運動に触発されて女性解放運動の機運が高まり、様々なバックグラウンドを持つ人々がその生き方を問い直されたのである。これらの影響は大衆の生活に留まらず、アカデミックな世界にも波及した。心理学ではライフサイクル論の再検討が図られ、特に女性を対象とするライフサイクル研究が興起した。生き方の多様化は今日に至るまで続いており、それは女性間にまで広がっている。

急激に多様化が進むあまり、このような今日の状況のもとでは、ライフサイクル研究において男女差を考慮することや、そもそも生涯発達研究において人の生涯を固定的に捉えるライフサイクル論自体が最早ナンセンスなのではないかという批判が表面化している。現在において、そして将来に向けて、女性特有のライフサイクル論を検討する意義とは何であるのか、そしてその意義のもとではいかなる研究が必要であり、現在ではいかなる知見が蓄積されているのかについて今一度検討する時期に差し掛かっているだろう。

本稿は女性のライフサイクル研究の一つの方向性を提示するものである。まず、ライフサイクルの定義に立ち返ったうえで（2章）、女性のライフサイクル研究の現在における意義を確認する（3章）。そしてこれまでの女性のライフサイクル研究の動向を整理し、さらに女性のライフサイクルと密接に関わるアイデンティティ研究では、ライフサイクルのどのような点に着目してきたのかを検討する（4章）。そして最後に、4章までに述べた知見から女性のライフサイクル論の課題と今後の展望を論じる（5章）。

2. ライフサイクルの心理学的定義

生涯発達研究のなかには、ライフサイクルという言葉を用いながらも、ライフサイクルの要素が含まれない研究も散見される。本題に入る前に、心理学に

におけるライフサイクルの定義を浚っておきたい。ライフサイクルは本来、生物学の用語で、心理学においても生物学的見地に基づき、以下の特徴を持つとされており、それらの特徴をまとめて定義と同義に扱う場合が多い。

第一の特徴として、人間の一生には規則的な推移がある点が見なす点が挙げられる (Levinson, 1986)。人間は、受精から始まり、胎児、出生後の発育、成長、成熟期、老年期、そして死を迎えて生涯を終える (依田, 1979)。この一連の過程は、人間として生きるうえで基本的な発達過程である。これは生物学的な説明であるが、心理学でライフサイクルの概念を用いる場合でも、人間の生涯には基本的な発達過程が存在していると考えられる。第二の特徴は、ライフサイクルという概念が人間の一生とその中に含まれる発達段階の両者を同時に含意するという点である (山本, 1992)。必ず受精から胎児期という過程を踏むように、人間の生涯には非可逆的なライフステージがあり、各ステージを経験することで人の生涯は進んでいくのであり、死に至るまでそれらのステージが用意されていると考えられている。第三に世代の連鎖が生じる点が挙げられる (山本, 1992)。当然、基本的な発達過程が仮定されるのであれば、世代に関係なく、言い換えれば、世代を通じてその発達過程は繰り返されるのである。以上の3点はライフサイクルの定義を説明するうえでは広く知られた特徴である。本稿においてもこの3点に基づく概念をライフサイクルとして論考を進める。

また、次節でライフサイクルとの比較で登場する概念であるライフコースは、ライフサイクルと意味が混同されやすい。そこでその意味をここで確認しておく。ライフコースは社会学を中心に使われる概念である。そしてライフコースは人間の一生を役割移行として捉えることを前提としていることから、役割ごとに発達段階を区切って捉えることは可能である (大久保, 1990)。ただし、人間に共通する規則や発達段階の順序を想定せずに、個人個人の人生行路に注目していることがライフサイクルと差別化される点である (山本, 1992)。

3. 現在における女性のライフサイクル研究に対する見方

本稿では女性のライフサイクル研究を検討するわけであるが、昨今では生涯発達研究でライフサイクルの概念を用いることに対し、批判的な見方を持つ研究

者もいる。先に確認した通り、ライフサイクルは生物学に基礎を置いた単一的なモデルを提供するのであり、多様な生き方が存在する現代にはこの概念は親和性が低いともいえる。ライフサイクルに批判的な立場の研究者は、この見地から、ライフサイクル研究は現代の人々の生涯の在り様を捉えきれていないと主張する。より具体的には、ライフサイクル研究は生物学的側面を重視するあまり、社会や文化との関わりを無視し (難波, 2000)、また、ライフステージによって人生を区切りそこに特定の意味を付すことで (e.g. Featherman, 1983)、多様性を度外視すると指摘している。社会学はかつてライフサイクル研究の主翼を担う学問の一つであったが、個々人の生き方を重視するライフコース研究に移行することでこれらの批判に返答するようになった。一方、心理学ではライフサイクル論の見直しは図られたものの (e.g. Levinson, 1978)、ライフサイクル研究に固執する然るべき理由が批判に応える形で提出されているわけではない。ただし、社会的変化の影響を受けやすいのが女性であり (井上・江原, 1991)、女性間の特徴を踏まえたライフサイクル論を提唱することで、社会的背景を考慮しながら多様な生き方を捉えることができると考えられている。したがって現代のライフサイクル研究は、女性を対象とすることで、その意義を確立している側面があるといえる。一方で、ライフサイクル研究の意義については心理学者は批判に直接的には応えてはいないとも捉えられるだろう。ライフサイクル研究の意義について、社会学者の小笠原 (1994) はライフコースと比較したうえで示唆を与えている。小笠原によると、両者の最たる違いは個別性を重んじるのか、あるいは共通性を重んじるのかという点に在る。そして前者に当たるライフコース研究では、価値中立的に人間の具体的な特徴の変化を記述するのに対し、ライフサイクル研究は発達という観点から人間の変化を価値づけ、その普遍性や共通性を捉える。ライフサイクル研究は人間の生涯を単一的に捉える点を批判されたわけだが、小笠原の指摘は、ライフサイクル研究は必ずしも生物学の立場から論じる必要はなく、あくまで発達特性や発達課題の共通性や普遍性を見出すことが重要であり、それがライフサイクル研究の意義であることを示している。

ライフサイクル研究において女性に着目する意義が多様なライフサイクルを明らかにすることであり、そもそもライフサイクルに着目する意義が共通性や普遍性を見出すことに在るならば、女性のライフサイクル研究の目下の意義は、現代において見られる多様なラ

ライフサイクルの存在を示していく作業と、それらに共通して存在する発達の核心に迫る作業を併せ持つことに在ると考えられる。しかし男性の生き方も多様化しており、女性のライフサイクルが必ずしも現代のライフサイクルの多様化の好例とはならないことが指摘され始めている。そしてそれゆえに男女ともに包含するライフサイクル論を提唱する必要があるという主張もある (e.g. Person, 1993)。それならば女性のライフサイクル研究に残された意義とは何か。

実のところ、女性のライフサイクル研究の意義は社会の趨勢とともに変化してきたところがある。次章では社会的潮流のなかで、先達の研究者がライフサイクルの何を女性特有と見なし、実際にどのようなライフサイクル論を打ち立ててきたのかを整理する。特にこれまでのライフサイクルに関する理論やそれに対する実証研究を歴史的・文化的観点から捉え、現代に通用するライフサイクル研究の意義を模索するための手掛かりとする。また、このように知見を整理することで、女性のライフサイクルが多様なライフサイクルの存在の証左となりえるのかどうかという最近の疑義についても改めて検討したい。

4. 女性のライフサイクル研究の動向

A. 女性のライフサイクル研究の黎明期

ライフサイクル研究自体は、1963年にエリクソンが『幼児期と社会』において固体発達分化の図式を提唱して以来行われてきたが、この頃は一面的で実情とはそぐわないものが主要な理論の多数を占めていた。例えば人間の発達は乳幼児期から青年期までと見なされていたり、生物学的側面を重視するあまり、外部の変化や影響を考慮しないくらいがあった。さらには主たる理論のほとんどが男性を対象として導き出されたものであり、女性のライフスタイルが考慮されていなかった。ライフサイクル研究に転機が訪れたのは1970年代である。この時代は、アメリカや日本における長寿化と生き方の多様化が進んだのであった。そして人間の発達は生涯に亘るのであり、その過程も様々であること、そして女性には男性とは異なる発達経路が存在することが指摘され始めた。

1970年代は女性の生涯発達に関していくつかの目立った研究があったものの (e.g. Levinson, 1978)、基本的には女性特有の発達経路の存在を指摘する程度に留まった。実際に理論が確立し始めたのは1980年代後半以降となる。追い風を吹き込んだのはアメリカの

発達心理学者のギリガンであった。ギリガンは著書 (1982) のなかで女性の発達経路が既存の理論の枠組みと合わないのは、女性が発達に失敗したのではなく、女性独自の発達経路が存在するという理論を展開した。ギリガンの理論は国内外で一大センセーションを巻き起こし、様々な分野で女性の生涯発達研究が行われるようになった。女性のライフサイクル研究も精力的に行われ、過渡期へと突入する。以下ではその時期から最近までの各主要理論を歴史的・文化的観点から整理する。

B. 各理論とその特徴に関する歴史・文化的整理

女性の生涯発達研究において、第2波フェミニズムの影響は無視できない。この運動では性差別の根源を制度では無く、セクシュアリティそのものに求める急進的な女性主義を特徴とし、学問や思想に流れる男性主義を徹底して告発するものだった。エリクソンの最初期のライフサイクル論 (1959) もまた、男性の生涯を前提とした男性主義的な理論であると指弾され (Wilkinson, 2004)、彼は補遺として「女性と内的空間説」(1964)を提唱した。この論説は女性の「子宮」に注目し、女性の身体構造には自ら選んだ男性の子を宿すべき「内的空間」が存在するのであり、女性のアイデンティティは、配偶者となる男性やその子どもにコミットするために開かれ、受け入れるに値する男性、つまり配偶者と出会うことで初めてアイデンティティの統合が完了するというものである。フロイト (1925) がペニス羨望説において、女性を男性が持つ器官を「欠如」する存在として付置したのに対し、エリクソンの内的空間説は女性特有の器官を「具備」する存在として女性性をポジティブに捉えたが (中野, 2017)、女性の発達を狭く捉えるものとして、再びフェミニストから非難を浴びることとなった (Sorell & Montgomery, 2001)。しかし結果的に相当な社会的インパクトを与えたことに違いはなく、この論説に対して次々と実証研究が行われた。ジョセルソン (1973) はエリクソン (1950) の提唱した個体発達分化の図式の第V段階、第VI段階について女性を対象に検討し、男性の場合はアイデンティティの確立後に親密性のテーマが問題となるのに対して、女性の場合は両者が並行して進行することを示した。この結果は女性は親密な関係をもつことでアイデンティティがより確かなものになることを意味し、間接的にエリクソンの「内的空間」説を支持した。一方でオコンネル (1976) は結婚後あるいは第1子出産後に専業主婦と

なる群と、子育て後に仕事に復帰する群は、子育てが終わる時期まで、「自分とは何か」を明確に定義できないのに対し、結婚・子育てと仕事を両立する群は自己定義と強いアイデンティティの感覚を持つことを示した。また、ホプキンス (1980) は女性の発達において「内的空間」の他に社会的・経済的活動によって家庭を維持するといった「外的空間」についての検討の必要性を指摘している。オコンネルとホプキンスは女性にとって家庭外のライフイベントも重要であることを示したといえる。この点を支持した研究として、「内的空間」説に関する実証研究ではないものの、レヴィンソンの研究 (1996) も主要な研究として挙げられる。レヴィンソンは先に取り上げた1978年の研究でライフサイクルの発達段階論をまとめたのち、性差の問題を取り扱うべく、女性を対象に発達段階論が当てはまるのかどうかを調べた。その結果、男性とほぼ同様の発達過程が見出された。しかし、女性間でのライフスタイルの違いに着目し、有職女性は専業主婦よりも幸福感が高いという結果を示したのであった。

そして1980年代に入ると、先ほど触れたギリガンが登場する。ギリガン (1982) は著作のなかで、「ケアの倫理」という概念を用いて、女性が従来の男性のライフサイクルに当てはまらないのは、女性の発達に欠陥があるのではなく、理論に問題があるのだと主張し注目を浴びた。「ケアの倫理」は他者志向的ありつつも、自己犠牲的倫理観ではなく、自己にも配慮する倫理観だという (山根, 2005)。そしてこのような「ケアの倫理」を女性が持つのは、ジェンダー・アイデンティティの発達において、女性は男子とは異なり、同性の母親とは分離が不要であることを起点として、むしろ他者との結びつきを優先しながら発達するためであるという。この主張が依拠するのは社会学者のナンシー・チョドロウのジェンダー発達理論であるが、このジェンダー論は主たる養育者が母親であることを前提としている点で文化依存的であるという批判がある (Golombok & Fivush, 1994)。また、ややもすれば育児をはじめとするケアの負担を甘んじて受けているのが女性であり、それが女性の発達を促すという解釈もされかねないギリガンの主張は、フェミニストから厳しい批判を受け (e.g. 上野, 2015)、必ずしも万人にその理論が受け入れられたわけではない。しかし女性のライフサイクル研究の口火を切る研究として、その存在は歴史に風化されることは無かった。

以上のように歴史的次元から概観すると、1980年代までの女性のライフサイクル論の意義は、発達心理

学者自身の意図に関わらず、フェミニストたちの運動の高まりに乗じて付与された観は否めない。フェミニストたちの主張が生涯発達研究としての価値を高めるものとは限らなかったが、しかし多くの人々の関心を集めるのには寄与したといえるだろう。

また「内的空間」説と「ケアの倫理」をはじめとする初期の理論では、男性が経験しえない妊娠や出産を中心としたライフイベントに着目することから、研究者が意識的に生物学的な立場に依って女性の発達特有のライフサイクルを見出そうとする傾向があったことが推察される。しかしその後のオコンネルやホプキンス、レヴィンソンによる研究が、女性の生涯発達にとって妊娠や出産が一要因に過ぎず、同時に仕事への従事が発達上の要因であることを示すと、初期の理論は女性が経験する数あるライフイベントの一部のみを取り上げたに過ぎないことが明らかとなった。このことは、女性のライフサイクルの構成に生物学的な性が揺るぎない根幹を成すものであり、その性が可能とする妊娠や出産といったライフイベントが重要であるという見方よりは、むしろ妊娠や出産がある社会や文化においてどのように価値づけられ、その社会や文化のなかで女性自身が妊娠や出産をどのように認識するのかということが、女性のライフサイクルの構成において重要であるという見方を与えたといえる。このようにして女性のライフサイクルの研究者らは、通文化普遍性を見出すことに汲々とするのではなく、社会や文化の影響を積極的に検討するようになったわけであるが、この変化は男性と対置される存在として女性を一括りするのではなく、多様な個々の生き方を含んだ集団として女性に着目する契機だったともいえるだろう。様々な生き方を含む集団として女性を捉えた研究として、マーサーらの研究 (1987) がある。この研究ではこれまでの人生を振り返りこれから先の生き方を展望する時機である「転換期」に着目し、母親であることの生涯発達の意義を検討するとともに、転換期とされる出来事や要因を歴史的、社会的、社会的、文化的、個体内的次元へと分類した。また、この研究は多方面から検討して初めて生物学的要因が特定されることを示唆した研究とも捉えられる。

以上が1980年代までの主要な研究の動向であるが、最後に最近の動向について述べる。「内的空間」説からギリガンの「ケアの倫理」までの理論において、女性特有の経路を特徴づける最大の点は「他者との関係性を重んじること」に集約することができるだろう。実際にフェミニスト心理学においても、関係性は女性

の生涯発達において重要な役割を果たすと考えられてきた。しかし関係性という概念もまた通文化的な女性の発達特性を言い表すと断言できるような研究は無く、多くの場合、それらはある社会や文化でのみ当てはまると考えられてきた。最近では寧ろ、関係性は男女両方にとって生涯発達における重要な要素であるという見解が強い。例えば、時代を遡ると、フランツとホワイト（1985）は、エリクソンの個体発達分化の図式は個の発達を重視するあまり、両性の発達過程で重要な親密性とアタッチメントを考慮していないことを問題提起し、個体化経路とアタッチメント経路の2経路から人の生涯発達を捉える複線モデルを提唱した。また、フランツらの複線モデルの影響を受けた岡本が「成人期における『アイデンティティ』と『ケア』の循環的発達モデル」（2002）を提唱し、アイデンティティの成熟は、自ら確立したアイデンティティである「個としてのアイデンティティ」でもって他者を支えるという「ケア」を通して「関係性に基づくアイデンティティ」が発達するという循環によって進展すると説明している（岡本，2007）。関係性の質の違いに性差が予期されるものの、これらのモデルは男女ともに該当するモデルを前提としていることから、少なくともモデルの外形には性差は反映されていない。このように最近では社会や文化によって性差が生じたとしても、社会文化的次元をも包摂するトップダウン式ともいえる理論を提唱することで、あえて女性性に着目しようとはしない傾向が強い。また、近年は女性のライフサイクル理論自体はあまり提唱されておらず、既に提唱されたライフサイクル論のあるライフステージに着目した実証研究が多数を占めている。このことからライフスタイルに着目した研究がライフコース研究とともに主眼に置かれているともいえるだろう。

C. 女性のアイデンティティ研究におけるライフサイクル

ライフスタイルの多様性と生涯発達との関係性は、最近では女性のライフサイクル研究の俎上に載らないものの、女性のアイデンティティ研究では活発に検討されている。女性のアイデンティティ研究を俯瞰することで、男性ではなく女性間で広まっているとされるライフスタイルの多様化がいかなるものと生涯発達研究が捉えているのかを知るには、女性のアイデンティティ研究を俯瞰することは有効な手立てである。また、アイデンティティは生涯に亘って発達するものであり、人間の生涯発達を理解するうえで重要な概念

として位置づけられている（1995, 杉村）。ライフサイクル理論にとっても、アイデンティティは不可欠なのである。このことから、アイデンティティ研究がライフサイクル論の構築に向け、いかなる有益な知見や観点をもたらしているのか、あるいは今後いかに寄与しうるのかを検討することも重要であろう。そこで本節では女性のアイデンティティ研究がライフスタイルのどの点に着目し、ライフサイクルをいかに捉えているのかを中心に検討する。そしてそれらの知見からライフサイクル理論の据えるべき意義を模索する糸口を掴みたい。

岡本（2000）は女性のアイデンティティ発達に関する研究の広がりをもとめている。それによると、アイデンティティ研究は「伝記・事例分析手法による女性のアイデンティティ形成」に関する研究と「ライフスタイルやジェンダーロールに関する研究」に大別される。後者はさらに、①母親アイデンティティや空の巣期を扱った家庭に関するアイデンティティ研究、②職業アイデンティティや職業選択を扱った職業に関するアイデンティティ研究、そして③職業・家庭役割葛藤に関するアイデンティティ研究の3つに分類できる。

「伝記・事例分析手法による女性のアイデンティティ形成」に関する研究については、偉人と呼ばれる女性たちの生涯発達を伝記資料を使って研究する西平（1996）のものが代表的である。西平は、まず女性の人格形成を、健全性・偉大性・超越性の3つの次元から捉える。そしてその次元から表現されるモデルを女性の生き方に当てはめる。そこから家庭と職業による拘束を乗り切るためのパターンを割り出す。そして最後に伝記からライフサイクルをそれらのパターンに分類する。特定のライフステージや役割に着目する以下の研究と比較して、西平の研究についてはライフサイクル全体を扱っている点が特徴である。また、後に触れるように、最近のアイデンティティ研究では家庭と仕事との両立に着目した研究が多い。西平の研究の分析対象の女性は、現代において着目される女性集団よりも年代が上であるが、家事や育児を女性が担うという性役割が根付く社会や文化においては家庭と仕事の両立が普遍的に課題となっていることを示唆する。

西平の研究に対し「ライフスタイルやジェンダーロールに関する研究」は特定のライフステージや役割に着目する。①母親アイデンティティや空の巣期を扱った家庭に関するアイデンティティ研究は、母親役割に着目し、母親アイデンティティ（e.g. Gottesman, 1987）と空の巣期（e.g. Gonzalez, 1990）を扱う。母

親アイデンティティに関しては、妊娠・出産期、子どもが巣立つ空の巣期に着目した研究が多い。特に空の巣期については「中年期の危機」の一つとして捉えられることがある。中年期の危機とは、子どもの巣立ちによる親役割の喪失をはじめ、体力の衰え（岡本, 1985）や職業上での限界の認識（岡本, 2007）などの喪失的体験を通して経験されるアイデンティティの危機のことである。なお、中年期の危機は「空の巣症候群」のみならず、いくつかの女性特有の問題も孕む。例えば中年期の危機に際して、女らしさや家庭を重視する群において否定的な症状が見られたり（Adelmann, 1989）、現代女性においては、その多くが男性よりも複数役割を有するために、中年期のアイデンティティの再確立の在り方も、個々人のライフスタイルによって異なった様相を示すことが明らかとなっている（堀内, 1993）。

職業人としての役割に着目した研究は②職業アイデンティティや職業選択を扱った職業に関するアイデンティティ研究に該当する。この研究は1980年以降の女性の社会進出とともに発展した（竹家, 2006）。最近では職業人としての役割のみならず、③職業・家庭役割葛藤に着目した研究が盛んである。この研究では職業と家庭のバランスをおかにとるのかを模索しやすい出産直後の時期に着目することが多い（e.g. 小泉・菅原・前川・北村, 2003）。

以上を整理すると、アイデンティティ研究では、役割やライフステージ自体に女性性を見出すというよりも、歴史や社会の変化に伴い、女性が経験するようになった役割やライフステージに着目している。例えば、職業アイデンティティは、西洋の社会や文化の初期では、主に男性が有するものだった。仕事や家庭との両立に関する研究に顕著であるように、女性のライフサイクルの変化あるいはライフスタイルの多様化のなかに見出される特徴を女性特有性あるいは女性間の違いと見なしているともいえる。

また、アイデンティティ研究が社会的・文化的次元から積極的に検討する点は注目すべきである。ライフサイクル研究を顧みると、生きる選択肢の多様化を受けてライフサイクル研究は男性と女性の両方を包摂する理論を打ち立てる方向へと向かうのか、あるいは女性特有性を打ち出すのかという二つの方向性の間で滞留している。アイデンティティ研究と比較したとき、その背景には生物学次元に偏重しようとするあまり、多角的な検討ができていないという課題が推察される。

5. 課題と展望

女性のライフサイクルは生物学的な性によって定められた宿命というよりも、社会や文化の産物に過ぎないと捉えるのが妥当であるという見解を強化する実証研究が蓄積されると、社会や文化の影響を多分に受ける存在として、女性間の多様性が着目されるようになった。そして女性間の違いを詳らかにすべく、ライフサイクルよりもライフスタイルの違いに重きが置かれるようになった。最近ではライフサイクル研究よりも、ライフスタイルの違いに着目した発達研究の一つとして、女性のアイデンティティ研究が活況を呈し、ライフサイクル研究は男女ともに包摂する理論を提唱する動きが目立っている。それでは女性の発達特性についてはアイデンティティ研究に委ねられるべきなのだろうか。しかし女性の生涯発達の全体像を理解するには、現在のアイデンティティ研究では不十分な点があると考えられる。女性のアイデンティティ研究では役割アイデンティティやその時代や歴史、文化における女性特有のライフイベントに着目しており、生涯全体のうちの一側面を扱うに留まることである。たしかにこれまでのアイデンティティの研究は、ある社会文化での女性のライフサイクルの一特徴を示し、発達上ある程度の役割を持っているのかもしれない。しかし、生涯全体という見地から各役割やライフイベントがどのような意味を持っているのかを検討するというライフサイクル的視座は欠けており、着目される役割やライフイベントが重要な発達段階と呼べるのかどうかについては疑問が残る点でライフサイクル研究を補完できていない。村田（1989）は、「発達の生涯経路を考える場合、単に〈段階〉を通過地点のようにとらえる単純な発想もあれば、それぞれの段階をつぎの段階に移行（発展）するための関門としてとらえる立場もある」と述べているが、この点を検討していないともいえよう。ライフサイクル研究は生物学的観点を重視し、アイデンティティ研究は社会・文化的観点を積極的に組み込む。両者が相互補完的に研究が進むことで、女性の生涯発達の全体像が明らかとされるだろう。

ライフサイクル研究がライフコース研究やアイデンティティ研究とは一線を画するのは、基本的な発想が生物学から着想を得ている点である。生き方の選択肢の多様化とともに、生涯発達を捉える軸は変化を余儀なくされ、生涯発達研究が歴史や社会など様々な外的要因に翻弄されるなか、ライフサイクルという視座は、

発達の本質とは何かということを知覚する機会や、そのための観点を提供する。この点から、生涯発達研究にとって、ライフサイクル研究の発展は重要な役割を担うと考える。

ただし、ライフサイクル研究が極端に生物学的根拠を求める傾向は否めない。ライフサイクル研究の動向を俯瞰すると、ある時代におけるライフサイクル論が、生物学的性差ではなく、社会・文化的観点から理論的に説明された場合、理論そのものが否定され、理論の修正がなされない傾向がある。そこには普遍性や共通性を見出すよりも、あくまで生物学的な説明の可能性を見出す傾向があるのではないだろうか。しかし、ライフサイクル論は生物学的な見方を取り入れるのであり、必ずしも生物学的な説明を行う必然性はないだろう。先に触れたように、ライフイベント自体よりもそれをいかに社会が価値づけるのかということがライフサイクルにとってより重要であるならば、生物学的な性のみならずジェンダーの観点を取り入れることは不可欠である。さらに普遍性や共通性を見出すためには、通文化的・通社会的・通歴史的な検討が重要であろう。特に第2波女性フェミニズムが興隆した1970年代の理論は再検討されるべきである。第2波女性フェミニズムはどの社会運動よりも個人レベルでの転換を促したことが指摘されている (Cole, Zucker, & Duncan, 2004)。例えばパーソナリティやキャリア選択 (Agronick & Duncan, 1998)、家族の選択 (U.S. Bureau of the Census, 1997) に関しては、他のコホート集団との間で結果に差が見られている。

また、仕事と家庭の役割から検討した女性のアイデンティティ研究が最近では盛んであると述べた。ライフサイクル研究においても、仕事と家庭の役割に着目することは、様々な社会・文化圏において必要であろう。殊に日本においてはこの研究は重要となる可能性が高い。最近では、男性が抱える介護と仕事の二重負担が深刻化し (津止, 2018)、仕事と家庭の両立は既に男女共通した課題であるためである。介護と育児では葛藤を経験する時期は違うが、少なくとも仕事と家庭と両立するということがいかなる意味を持つのかというテーマのもと、ライフサイクル論が構築されることが期待される。また、この研究は「ケア」と「関係性」の男女差について何らかの示唆を与えようだろう。

女性のライフサイクル研究は基本的には女性特有性を見出すことを重んじるべきだが、先に取り上げた日本の傾向をはじめ、近年のライフサイクルの傾向を見る限り、男女ともにライフサイクルが多様化し最終的

に女性は男性と同じライフサイクルに至るという将来展望も見据える必要があるだろう。そのような仮託のもとでは現在の女性のライフサイクル研究が一過性のもとの見なされ、存在意義が理解されにくいかもしれない。しかし女性のライフサイクルが多様化する過程において表出するライフサイクルの違いが、特定の時代、歴史、社会、文化における集団のライフサイクルを予測し、また、多様なライフサイクル論が男女共通するライフサイクル論をより包括的かつ現実的なものにするための豊かな情報源となると考えられる。

女性のライフサイクル研究における各論は、ある歴史、社会、文化のもとでは適合しないという脆さを伴ってきた。一時的であれ、ライフサイクル論が女性性に特徴を求める限り、歴史、社会、文化という可変性と常に対峙しなければならない。そしてこのような可変的な条件のもとでは、研究の積み上げは非常に困難である。また、女性のライフサイクルの研究の行き着く果ては、女性性という言葉によって説明されるものなのか、そもそもそのような最終地点が存在するのかについても予測しがたい。しかし少なくとも、議論や研究の蓄積は、ライフサイクル研究全体には寄与するのであり、女性のライフサイクル研究の発展が望まれる。そのためには、生物学や文化人類学、社会学を中心に学際的な視座を取り入れ、広い視野を以て検討する姿勢が必要であろう。

引用文献

- Adelmann, P. K., Antonucci, T. C., Crohan, S. E., & Coleman, L. M. (1989). Empty nest, cohort, and employment in the well-being of midlife women. *Sex roles, 20* (3-4), 173-189.
- Agronick, G. S., & Duncan, L. E. (1998). Personality and social change: Individual differences, life path, and importance attributed to the women's movement. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*(6), 1545.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society* (1st ed.). New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 仁科 弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 1-2 みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 西平 直・中島 由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1964). Inner and outer space: Reflections on womanhood. *Daedalus, 93* (2), 582-606.
- Erikson, E. H. (1963). *Childhood and Society* (2nd ed.). New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 仁科 弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 1-2 みすず書房)
- Featherman, D. L. (1981). The Life-Span Perspective in Social Science Research. In Robert McC Adams, Neil J. Smelser, and Donald J. Trei-

- man (Eds.), *Behavioral and Social Science Research: A National Resource. Part II* (pp. 237-293). Washington, DC: The National Academies Press.
- Franz, C. E., & White, K. M. (1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of personality, 53* (2), 224-256.
- Freud, S. (1925). *Some physical consequences of the anatomical distinction between sexes*. (フロイト, S 懸田 克躬 (訳) (1969). 性欲論 3 篇 フロイト著作集 5 人文書院)
- Golombok, S., & Fivush, R. (1994). *Gender development*. New York: Cambridge University Press.
- Gilligan, C. (1982). In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ギリガン, C 岩男 寿美子 (監訳) 生田 久美子・並木 美智子 (訳) (1986) もうひとつの声: 男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店)
- Gonzalez, P. C. (1990). Ego development and ego identity in mothers at mid-life. *Dissertation Abstracts International, 51* (5-B), 2643.
- Gottesman, M. M. (1987). The relationship between maternal age, level of ego development, and progress in maternal identity formation. *Dissertation Abstracts International, 48* (9-B), 2604.
- Hopkins, L. B. (1980). Inner space and outer space identity in contemporary females. *Psychiatry, 43* (1), 1-12.
- 堀内 和美 (1993). 中年期女性が報告する自我同一性の変化 教育心理学研究, *41* (1), 11-21.
- 井上 輝子・江原 由美子 (編) (1991). 女性のデータブック 有斐閣
- Josselson, R. L. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence, 2* (1), 3-52.
- 小泉 智恵・菅原 ますみ・前川 暁子・北村 俊則 (2003). 働く母親における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが抑うつ傾向に及ぼす影響 発達心理学研究, *14* (3), 272-283.
- コール, R. E., Zucker, A. N. & Duncan, L. E. (2014). 変わりゆく社会, 変わりゆく女性 (男性) R. K. アンガー (編) 森永 康子・青野 篤子・福富 護 (監訳) 女性とジェンダーの心理学ハンドブック (pp.18-31) 北大路書房
- Levinson, D. J. (1978). *The Seasons of a Man's Life*. New York: Knopf. (レヴィンソン, D. J. 南博 (訳) (1980) 人生の四季 講談社)
- Levinson, D. J. (1986). The conception of adult development. *American psychologist, 41*, 3-13.
- Levinson, D. J. (1996). *The Seasons of a Woman's Life*. New York: Knopf.
- Mercer, R. T., Nichols, E. G., & Doyle, G. C. (1989). *Transitions in a woman's life: Major life events in developmental context*. New York: Springer.
- 村田 孝次 (1989). 生涯発達心理学の課題 培風館
- 中野 祐子. (2017). Eriksonの内空間論をめぐる考察: 女性性の生涯発達と心理臨床の観点から 人間科学部研究年報, *19*, 85-100.
- 難波 淳子. (2000). 中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察: 語られたライフストーリーの分析から 社会心理学研究, *15* (3), 164-177.
- 西平直喜 (1996). 生育史心理学序説 金子出版
- O'Connell, A. N. (1976). The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional, and nontraditional women. *Journal of Personality, 44*, 675-358.
- 小笠原祐子. (2014). ライフコースの社会学再考: ライフサイクル視点再導入の検討 研究紀要, *75*, 139-153.
- 岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究, *33* (4), 295-306.
- 岡本祐子 (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 岡本祐子 (編) (2000). 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房
- 岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房.
- 大久保孝治 (1990). ライフコース分析の基礎概念 教育社会学研究, *46*, 53-70.
- Person, E. S. (1993). The "construction" of femininity: Its influence throughout the life cycle. In G.H. Pollock & S. I. Greenspan (Eds.), *The course of life, Vol. V: Early adulthood*. Madison, C. T.: International Universities Press.
- Sorell, G. T., & Montgomery, M. J. (2001). Feminist perspectives on Erikson's theory: Their relevance for contemporary identity development research. *Identity: An International Journal of Theory and Research, 1* (2), 97-128.
- 杉村 和美 (1995). ライフサイクル-男性と女性 南 博文・やまだ ようこ (編) 老いることの意味-中年 老年期- (pp. 117-152) 金子書房
- 竹家 一美 (2006). 女性の生涯発達研究に関する一考察-アメリカにおける研究の概観を踏まえて- 教育方法の探求, *9*, 73-80.
- 津止 正敏 (2018). 男性の介護労働-男性の介護者の介護実態と支援課題 日本労働研究雑誌, *699*, 40-51.
- 上野千鶴子 (2015). 差異の政治学 岩波書店
- ウィルキンソン, S. (2014). 女性とジェンダーに関する理論的視点 R. K. アンガー (編) 森永 康子・青野 篤子・福富 護 (監訳) 女性とジェンダーの心理学ハンドブック (pp.18-31) 北大路書房
- U. S. Bureau of the Census. (1997). Statistical abstract of the United States (117th ed.) Washington, DC: U. S. Government Printing Office.
- 山本多喜司・シーモア・ワップナー (1992). 人生移行の発達心理学 北大路書房
- 山根純佳 (2005). 「ケアの倫理」と「ケア労働」-ギリガン『もうひとつの声』が語らなかつたこと ソシオロギス, *29*, 1-18.
- 依田新 (1979). 新・教育心理学事典 金子書房

(指導教員 遠藤利彦教授)